41

絵画修復家のアトリエから

加賀優記子　絵画修復家

もう6月に入ったというのに、まだ新型インフルエンザが都内で発生していますね……。この号が出る頃には、究極的に暑くって、20度以上で死滅するといわれているウイルスの力も、さすがに弱まっているのではないかしら。

ふざけちゃいけないけど、インフルエンザの話では、思い出すとにやりとしてしまう出来事があった。神戸や関西方面で、インフル患者が爆発的に増えてきだした頃、銀座大通を歩いていたら、奈良から来た大勢の修学旅行生徒とすれ違った。その時、一緒に歩いていた同僚の女の子が「あー、もしインフルウイルスが奈良で鹿と混ざっちゃったら鳥と豚と鹿の混ざった【いのしかちょう】ウイルスっすねー！それって最強じゃないっすか。」と元気良く私に言った。そうしたら、後を歩いてた知らないおじさんがぼそっと「たったの20点だ。強くない。」って言ったのです。私達、思わず振り返って、「じゃ、一番強いのって何なんですか？」と思わず聞いてしまった。なんだか忘れちゃったけど、50点のがあるんだって。へえ！……と、都会の真ん中でおかしなコミュニケーション。猪鹿鳥人ウイルス。キメラみたいだなあ。

それにしても、今回の、爆発的に増えたインフル患者への神戸や大阪の対応、政府の動き方を見て、ずいぶん色々なこと考えてしまった私です。

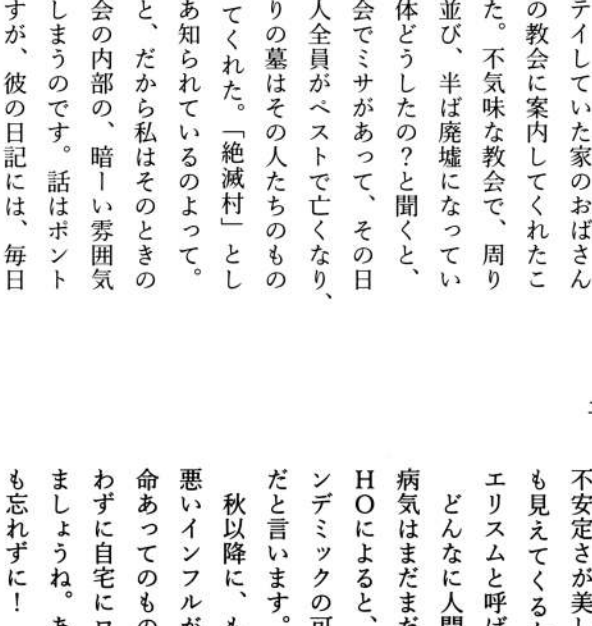
水際対策が効力を発揮、という報道をしている傍ら、潜伏期間は7日ぐらいと発表している……と、言うことはあの空港の体温サーモグラフィーも気休め程度なのだということや、専門家がにっこり笑いながら教室の中で分子運動的にくっついては離れ、教室でひしめき合っている子供たちを背景に、うがいと手洗いの大切さを説いている、（既に予防できる状態ではないのになあ……）その（実は諦めてるんだけど）表面的には自信に満ちたニュース映像は、見ていてなんだか薄気味悪い気がしていた。

もしこれが死亡率の高い殺人ウイルスに変貌を遂げても、きっと最初はやはりこんな気休めで「国民全体で対処してるフリ」を映像として流すのだろうか。どんなタイミングで空港は、企業は、学校は気休めでないホンモノの対処を取ることになるのだろう、と「（今回は大したことの無い症状のウイルスなのだし）たぶんもうこんなに厳密にやらなくても大丈夫だろうということで、（あとかなり経済的理由も絡んで）通常の生活を取り戻すことにした」宣言を行った若い大阪市長をテレビで見ながら考えた。

その宣言をしているその日にも、継続的にWHOでは、感染の蔓延を極力抑えるように提言していた。蔓延は、ウイルスの変性の確立を高めすれば殺人ウイルスのるかも知れず、そうすウイルス蔓延国日本へ人へのそれをはるかに経済はとんでもないほろう。しかし国内の論目の前の経済的な理由大多数が黙認した。一患者などのウイルスに事者ではない元気な大事の「騒ぎすぎなんじを不安に聞いたはずだだったら、やっぱり出警戒して欲しいと思っ心臓でも患っている人うな気持ちで居ただろランス時代の友人がガ入院していたが、警戒に対して非常に怯えても会えず、医師や看護心を抱くだろう。

あの当時、ニュース弱者が切り捨てられた私一人だったろうか。こうして起きてくるもの、日本人はとっても非科学的なのだと思われるでしょう。まあメキシコでも、通常の生活に戻すときに、ネクタイをはずせと言ったらしいけど。（ネクタイはしょっちゅう洗えないからですって。）

私はこうした二つの意見が対立する際にいつもフランスの国民性を思い起こしてしまう。フランスでは弱者の方がかえって立ちあがり、自分の権利を主張しまくり、きっと大騒ぎになっていただろう。きっと、透析患者と妊婦の大きなデモが発生していたかもしれない。（あ、感染



ハンス・ホルバインにより描かれた死の舞踏の版画。ネズミを媒体とする腺ペストから、いつしか空気感染する肺ペストへと変化をきたし、その急激に訪れる死への恐怖のために、人々はヒステリー状態となり市中で踊り狂ったという。

を恐れてそれはしなかったか！）

私自身、すごくフランス人的気質っているようで、仕事も子供の学校学校や行政に決められるのではなくて自分の判断で休もうと身構えていて一応生死にかかわる問題について、の意見や行政によって、足並みを揃必要はそもそも全く無い、と思ってのだ。この秋以降、またもっと死亡高いインフルの蔓延の恐れがあるとれている今日この頃、そういった自判断を信じ、実行できる強い意志をんと自分自身に問い詰めて、確認しくことはかなり重要かなと思ってい

前置きが非常に長くなったのは、ん私がこうした「感染症」について常とても強く興味を持ってきたからだと思います。西洋美術史を勉強すると当たっては、どうしてもペストの蔓という歴史的事実を理解しなくてはません。そのとき、人々の社会生活んなだったのだろう、これほど大きく生活の基盤を揺るがした病気の存在はっと文化、様式の面でも影響を及ぼしているに違いない、そのことに集中し時のルネサンス後期をペスト蔓延を調べていた時期があるのです。それはもちろん当時の人々のキリスト教信仰を調べることにもなる訳ですが。

そこでとりわけ「感染症」でいつも思い出すのはまたまたボントルモのこと。ペストが蔓延し、彼は自宅にいわゆるロフトを作り、梯子で自分が登ったら、後はその梯子を引き上げて誰にも会おうとしなかった、というのです。それゆえに彼は一風変わった画家と世に言われているのですが、感染症ということで考えれば、実は彼のやり方で正解。ウイルスなんてそうそう防げるものなんかじゃないんだから（たとえ欄干や町中を洗ってもね、）誰かに会っちゃあいけないのです。ボントルモが生きた時代と同じ年代の版画に、興味深いものがあります。ペストが蔓延し、人々が不安になって教会に祈りをささげるために集まる。その列の中で、前後の人が話をしていたら、片方の人は保菌者だったのね。で、もう片方の話をしていた人が、その会話をしている最中に肺ペストで即死する、ということをあらわした画面なのです。その絵は、ペストの怖さを知るのにものすごいインパクトがありました。

配性の私はついそんなことまで想像してしまった。強気で物言う政治家、気休めのニュース、嫌と強く言えない市民、じっと見ていれば、それぞれの都合、（預けられるところがないので保育所再開で良かったといっているお母さん、預かってもらえるところがない老人の家族。）でも感染のリスクがあるのよね、その子供に、その老人に、その病人に。しかし彼等の嫌と言えるチャンスは平等には無い。（当の本人がデイサービスに行けずに困っている場合も多々あったのも判っているけれど。）ただ、少なくとも映像の中での意見は、自粛を解きましょうという一方的な意見が優勢だった。だって、元気で働きたい人が優勢だったからだ。世の中は、確実じゃないけど、大丈夫そうだから、まあ、いいじゃん。……そういう風潮になっていた。

報道の中でもとっても呆れたのは、温泉場での町民総出の大掃除風景かな。まさかあれでインフルエンザウイルスを文字通り払拭できると信じているわけでもないでしょうけれど、もしあれが世界のメディアに流されたら、中川大臣以来のかなり恥ずかしい映像になってしまいそ

ニコラ・ド・プッサン作　ローマにペストの終焉を告げる聖ロマーナ

それに私は以前にイギリスに住んでいて、その時ステイしていた家のおばさんが、近くの村の教会に案内してくれたことがありました。不気味な教会で、周りには墓が立ち並び、半ば廃墟になっている。これは一体どうしたの？と聞くと、昔この村は教会でミサがあって、その日に出席した村人全員がペストで亡くなり、それでこの周りの墓はその人たちのものなのだと教えてくれた。「絶滅村」としてこの辺じゃあ知られているのよって。感染症と聞くと、だから私はそのときの迫力のある教会の内部の、暗ーい雰囲気を思い出してしまうのです。話はボントルモに戻りますが、彼の日記には、毎日

それはそれは神経質に、「今日はどれくらい何を食べた」という食べたものだけ（あといくらしたかということも付け加えて）が書かれた、なんだか妙な文章ばかりが残されているのですが、これだって今日の「健康オタク」のはしり、と考えたらすごい努力家ですよね。それだけ彼は自分の健康に責任感があって、制作に打ち込む意欲があったとみなしてもいいのではないか、と思う。まあ、でも彼の作風はほんとに彼の細心さと言うか、なんだか社会不安を映したような表情、不安定さが美しい色彩やデッサンの中にも見えてくるんですけど。（それはマニエリスムと呼ばれる様式でもある……。）

どんなに人間が進歩したといっても、病気はまだまだ克服はされていない。WHOによると、実はペストだってまだパンデミックの可能性は終わっていないのだと言います。

秋以降に、もしもまたこれまで以上に悪いインフルが流行るのなら、皆さん、命あってのものだねですよ～。誰にも会わずに自宅にロフトを作って梯子に登りましょうね。あ、食べ物買いだめするのも忘れずに！

かがゆきこ●絵画修復家。大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ルーブル美術館の絵画修復員を経て、現在は鵠沼で修復工房を主宰。